

書 評

中村 保著：『ヒマラヤの東 山岳地図帳』

ナカニシヤ出版, 2016年発行, A4判変形, xvi+333ページ,
ISBN 978-4-7795-0994-0, 10,000円 + 税.

本書は世界で名が知られた登山家である中村 保(なかむら たもつ)による。登山家としての業績はここでは述べないが、彼はこれまでに、『深い浸食の国—ヒマラヤの東 地図の空白部に行く(2000年刊)』『チベットのアルプス(2005年刊)』『DIE ALPEN TIBETS(2008年刊)』など多くの書籍を出版しており、『最後の辺境—チベットのアルプス(2012年刊)』で第2回梅棹忠夫・山と探検文学賞を受賞している。また、彼は、2003年に秩父宮記念山岳賞を、2008年には英国王立地理学協会バス・メダルを受賞している。特に *Japanese Alpine News* という日本山岳会の年報の編集を通して、日本の登山界の情報を英語によって世界に発信している。こうした努力は日本の登山の世界ではきわめて珍しく、海外に対するひじょうに大きな貢献になっている。

本書はそのタイトルが示すように、基本的には「地図帳」である。ただし、素晴らしい写真が多数掲載されている点で通常の「地図帳」とは異なっている。しかも、通常のいわゆる「地図帳」と決定的に異なる点は、自ら現地を踏査して、地形を確認し、写真を撮影して、この「地図帳」を仕上げた点にある。その行動力は並大抵のものではなく、フィールドワーカーである地理学者であっても、長年の期間をかけなければ完成し得ないものであり、さらに、長年の期間をかけたとしても必ずしも可能になるということでもない。登山家・探検家としての経験・技術がなければ、この偉業を達成することはできないのである。

本書の解説は、英語、日本語、中国語の3つの言語で構成されている。まず、p. 10～39には、英語で書かれた3つの章がある。第一章は Geographical Overview で、第二章が Basic Information, そして第三章が Mountain Ranges, History of Climbing and Explorations である。次の p. 40～64 が日本語で書かれており、英語と同じ第一章「地理学的考察」、第二章「最後の辺境」、第三章「山系と探検・登山史の概説」からなる。そして、p. 65～85 は同じ章立ての中国語の記述である。さらに、本書の中核部分である「ピーク・マップ」が、Part I (中央チベットの東端, 南チベット, 東チベット, p. 89～198), Part II (横断山脈—東南チベット・雲南・四川, p. 199～294), および Part III (アジアの大河の源流域, p. 295～319) へと続く。

解説の3つの章のうち、第一章では、最初に、「ヒマラヤの東」を定義している。「ヒマラヤの東」は中村自身の「造語」であるといい、「ヒマラヤ山脈の東

に広がる面積的にはヒマラヤにも匹敵する地域を総称するための一つの表現」であるという (p. 40)。定義の後には、各地の気象と氷河の概要が記されている。第二章「最後の辺境」は実質2ページ強の短い章であるが、「ヒマラヤの東」の位置づけが行われている、とても興味深い章である。

第三章は、解説の後に続く「ピーク・マップ」の概要について述べたもので、3つの章からなる解説の章の中では最も多くのページが使われている。本書の核心部である念青唐古拉山(ニンチェンタングラシャン)山系は、p. 48～51で解説されている。実に多くの6,000 m級の山が未踏峰であることや、それどころか写真さえほとんどない山域がまだかなり残されていることがわかる。名峰ミアコンカを擁する四川省の大雪山山系は、p. 57～59で解説されている。台湾にも大雪山山系があり、我がふるさと北海道中核部の大雪山の地元と交流を深めようという動きもあるが、北海道と台湾に加えて、さらに中国にも大雪山が存在していることから、この3つの山域で交流が深まると興味深い、などと妄想が膨らむ。

「ピーク・マップ」には、南チベットの東ヒマラヤ、中国/ブータン国境とその北側、マクマホンラインから南迦巴瓦峰とギャラベキまでが含まれている。「ピーク・マップ」の章は、3つに区分されていて、Part I (p. 89～198) では中央チベットの東端、南チベット、東チベットが、Part II (p. 199～294) では横断山脈—東南チベット・雲南・四川が、Part III (p. 295～319) ではアジアの大河の現流域が扱われている。

「ピーク・マップ」とはいつても、単に地図が載っているだけではない。この章はそれぞれの山域の地図に加えて、多数の写真で構成されている。本書には全部で540枚の写真が載っている(そのうち388枚が著者自身の撮影による) というが、ほとんどが「ピーク・マップ」の章に含まれている。地図は、等高線地形図ではなく、稜線、山頂(ピーク)、氷河、氷河湖、河川、ルートからなる。地名には日本語表記はなく、英語と中国語で記載されている。また、写真1枚1枚には、英語のキャプションがついている。

これらの写真は、登山家や探検家にとっては、ルート選定上きわめて貴重な情報源となる。しかし、それだけではなく、地理学的には、将来、同じ地点から同じアングルで写真を撮影すれば、長期間にわたる景観変化(植生の変化、森林伐採の進行、開発、土地利用変化、氷河の消長など)を捉えるのにひじょうに大きな意味を持つ。この点で、本書を地理学関係の学術雑誌で紹介する価値があるといえる。それだけに、写真の撮影年月日があれば良かったのに、と残念に思う。

日本の出版業界の現状がきわめて厳しいことは誰も

が知るところであるが、山に関するこうした本を出版できる会社があることにも敬意を表したい。折しも今年日本の山の日が8月11日にスタートする記念すべき年である。国際山の日が始まってから10年以上遅れてのスタートである。日本から世界に向けて、山岳関係の書籍が出版されたことは、実に良いタイミングであったといえる。

(渡辺 悌二)